

フランスの革命運動 一八一五―七一(四)―一

ジョン・プラムナツツ
高村 忠 成 (訳)

第四章 第二共和政(一)

第一節 革命

第二節 六月暴動まで

第三節 保守派の継承(一八四八年六月―一八四九年六月)

※以上本号

※以下次号

第四節 大統領対保守派

第五節 共和国最後の数カ月

第一節 革命

(1) 二月革命

① 二月二一日

革命の火蓋を切ったのはまたもや学生であった。何人かの学生が『前衛』紙の編集室に集い、フランス全土を興奮の坩堝に巻き込んだ改革宴会について話しあった。学生たちが、改革宴会が開かれそうにもないということを聞いたのは、すでに夜半を回っていた。学生たちは、待望の催しがいよいよ始まるものと期待していた。ところがそれは、政治家たちが尻込みしたため中止になった。期待感が大きかっただけに、学生たちは中止の報告には納得がいかなかった。そこで彼らは、政治家たちにはない勇気を示そうとした。すなわち、翌二月二二日に大規模なデモをしようとしたのである。学生たちは、自分たちが立ち上げれば労働者が刺激を受け、革命運動は一気に燃えあがるだろうと確信した。

② 二月二二日

二二日の朝、学生たちはパンテノン広場に集まった。午前一〇時には、その数二〇〇名ぐらゐとなり、やがて行進が始まった。学生たちはパリの労働者階級の地区を通り、大回りをしながらフランス下院の議場であるパレ・ブルボンに向かった。行進は何の規制も受けずに目的地に着くことができた。パレ・ブルボンに到着した時には、行進する人の数は山のようにふくれあがり、もはやパリ警備隊の手には負えなくなっていた。夕刻五時、国民兵が召集されたが、暴動の知らせはすでにパリ中に広まっていた。しかも、労働者たちの作るバリケードも、その数はどんどん増えていた。政府の召集に応じたのは、パリの富裕な地区の連隊だけであった。だが、その時点では、政府は労働者まで

がその暴動に加わっているということは知らなかった。まもなく、夜の戸張りが降り始めた。

パリ駐留の正規軍が、一気にパリケードの一面を占拠した時、政府はこれで暴動も終わったと確信し、軍隊を労働者階級の地区から撤退させた。そして、もし翌日、暴動が再発したら、軍隊と国民兵でそれを鎮圧してしまえば、それでよいということにした。

③ 二月二三日

しかし、翌朝、国民兵が再度召集された時、命令通りに戦おうという意思と、実際の力をもっていたのは、わずかに騎兵部隊（富裕階級から徴兵）と、一二の歩兵部隊中、三部隊だけであった。他の九部隊には、前日から多くの兵士が召集されていたが、むしろ彼らは、政府に対して怒りを懐いていた。パリの中産階級から構成され、じつに体制の主たる基盤をなしていた軍隊の四分の三が、体制への忠誠を拒否していたのである。

政府はおそらく、正規軍をあてにしたのかもしれないが、正規軍はフランスの軍隊であり、よくて政治的に無関心、悪ければ一七八九年の時のように、政府を最も脅かしていると思われる階級と手を結んでしまう恐れがあった。国民兵は、ブルジョア階級の優位と防衛のために選ばれた特別につくられた軍隊であったので、国民兵の四分の三が離反したということは、中産階級の統一が崩れ、とくに彼らの中でも、比較的裕福でない層の人々が、政府に反旗を翻したということの意味した。国王は、富裕でない層から構成される九つの歩兵部隊が反逆したということ聞いた時、ギゾーを罷免し、モレを首相に任命した。このモレは、ギゾーよりも柔軟性に欠ける人物であった。

ギゾー政権の崩壊によって、反乱部隊はすぐに鎮静化した。しかし、パリの労働者たちは、それでもおさまらなかった。彼らは軍の兵舎を攻撃し、軍に対する抵抗を続けた。彼らは体制に対して、深い敵意を懐いていた。もはや国王が退位する以外に、彼らを満足させる方法はないかのようには思えた。労働者たちは、つねに不満を懐いており、それを闘争でもって解消しようとした。そのため彼らを鎮めるには、彼らを絶対的な孤立状態に追い込むか、または、強

力な軍隊の力によって、抵抗が無駄であることを解らせる以外になかった。

実際その日、すなわち、二月二三日水曜日の夕刻、労働者たちは孤立する危険にあった。国民兵は、玉座への忠誠を誓って再統一されたし、穏健、急進両派の共和派の指導者たちは、自分たちの好機を窺っていた。もし労働者たちがあと一日ないし二日、暴動を続けたならば、国王に対するあらゆる怒りは解消し、かえって暴動に対する不安が増大するであろう。人々は、かつて国王が革命家たちからフランスを守ってくれたように、今回もそうしてくれるのではないかと期待するようになった。時は今や、国王の味方であるかのようにであった。だから国王が少し辛抱すれば、やがて彼は状況を主導できるようになれるはずであった。

しかし、同日夕刻、国王の期待をすべて断ち切ってしまうような偶発的事件が勃発した。ギゾーの退陣を祝う人々の群れが、カピュシー又通りを行進していた時、軍隊と衝突したのである。その衝突自体はたいしたことはなかったが、突然だれかが、恐らくその意思はなかったであろうが、銃を発射したのである。この銃声によって、「裏切り者」とのさげび声が上がリ、パニック状態となった。そして最後は、定石通りの乱射戦となり、三六人が死亡し、約七〇人が負傷したのである。

この不幸な事件によって、近年国王と和解した人々は、ふたたび国王と対立するようになった。ギゾーの解任は、政府が時をかせぐための一時的な策でしかないとの噂が広まった。暴徒の大虐殺が計画されている、政府に抵抗した者はその行為に見合うだけの償いをしなければならぬ、などの流言も飛び交った。無秩序状態に陥ると、穏健な人々は一般に、二つの恐れを懐くものである。すなわち、反動の恐怖と革命の恐怖である。暴動が起こると、穏健派の多くの人々は、最初は暴徒に同情する。だがその同情は、政府が譲歩をしても暴徒がまだ満足せず、さらに暴力に訴えようとすると、今度は怒りに変わる。もし暴徒が、この怒りが強くなる前におとなしくなれば、同情が復活する。しかし、それとともに今度は、反動の恐怖が強くなる。これが、カピュシー又通り事件以後に起こる出来事のあらまし

である。

国王に悪意はなかった。国王は、これまでギゾーと分有していた権力を、たとえある日突然、再び自分のところに統一せざるをえなくなったとしても、彼は状況に敏感で、また人間的でもあったので、それをパリの街頭に集うギゾーの敵たちを射ち倒してまでも行うつもりなどなかった。しかし、事件が発生してしまった。しかもそれに続く混乱状態の拡大や、反動を恐れる激しい恐怖が、革命派に好機を与えることになった。その夜革命派は、パリ中にバリケードをつくり、銃砲店やいくつかの兵舎を襲撃したのである。

④ 二月二四日

二月二四日、木曜の朝までに暴徒は準備を完了し、武装して革命の息吹に燃えた。パリにいるすべての住民が、暴徒に好意的であったというわけではないが、パリはすべて国王を嫌っていた。長い間パリ市民の嘲笑的だった男が、あえてパリ市民を脅すようなことをするであろうか。

カピュシーヌ街の虐殺と、それに対するパリの反応を聞いた時、国王ルイ・フィリップは、何よりも融和策をとった。この時点では、彼は強い信念を持っていた。まず彼はモレを解任し、ティエールとバロを中心とする自由主義的な内閣を作った。そして次に、アルジェリアの征服者ビジョウをパリの軍隊の指揮官に任命した。ルイ・フィリップは、まだ状況は自分の手中にあると確信していた。

ビジョウは、二月二四日、木曜早朝五時に、攻勢に転じた。彼には絶対成功するとの自信があった。彼はできる限り抵抗を鎮めるため、新内閣の発足を暴徒たちに知らせ、軍隊には和解が成立するまで、絶対に武力を行使してはならないと命令した。国王は権力は好きだったが、武力や流血は好まなかったのである。

だが、ビジョウはすぐに、自分の命令が徹底されていないことを知った。暴徒のリーダーも、国民兵の将校も、雰囲氣的に国王の言い分を聞ける状況になかった。ただ、彼らにも聞きたい気持はあった。だからといって、説得され

ることは拒否した。やがて各所で、暴徒と国王の將校たちとの間で話し合いが始まった。それは敵対する者どうしとは思えないほど平和的なものであった。そして時間がたつにつれ、その話し合いは打ち切ることが難しくなっていた。軍隊が国民兵や反乱者たちと親しくなり始めたのである。彼らは、互いに好意を懐きあうようになった。その結果、彼らの間で戦いが行われることなど考えられなくなった。ビジョウの將校たちは、新しい指示を求めたり、状況の報告などはしたが、それ以外は何もしようがなかったのである。

ビジョウは部下の報告を通して、指揮下にある軍隊が、血を流すことは望んでいないということを知った。コンコルド広場やシャトードオ^{（上）}でいくつかの衝突があったが、それは誤解から生じたものであった。兵士や民衆の間での話し合いは終りそうになく、自称戦闘者たちは、たがいに良き友人であるとの思いを強くしていった。こうなると国王とその側近たちは、ますます悪役のようになった。もちろんそうではないかも知れないが、この点は、内輪もめするほど価値のある意見の相違ではない。大切なことは、国王がビジョウから攻勢に転じることは不可能であるという報告を聞いた時、退位を決意し、孫のパリ伯に玉座を譲ることにしたということである。

(2) 革命後の動向

反乱者は、昼までにパリを制圧した。戦闘中背後にいた政治指導者たちは、勝利のための計画の準備にとりかかっていた。それは政治指導者にとっては当然の仕事であった。政治指導者たちは、パリケードの上では全く役にたたないが、反乱者にとっては、彼らの援助は必要であった。すなわち、自分たちが勝利しても、政治指導者たちの援助がなければ、反乱者たちには、次に何をやるべきかわからないからである。このことは、反乱者たちにとってはわかりすぎていたことだったので、彼らは決して権力を掌握しようなどとは思わなかった。すなわち、だれも反乱者たちに、君たちはフランスのような国を統治するのに適していない、ということを言う必要はなかったのである。

① 穩健共和派

フランスの政治の将来が、だんだん決まってくといふことが実感されるようになって、主導権をとりたいたいといふ三つの集団が現われてきた。そのひとつが、穩健共和派の指導者たちであり、彼らは自分たちの大新聞『ナシヨナル』紙の事務所が集まった。昼すぎ彼らは、今や急務となった臨時政府をだれが構成するのかという問題の検討に入った。そのリストが完成した時、その写しを路上で待機していた人々に公表した。そして穩健派の政治指導者たちは、怒号や拍手などで示される群衆の希望を満足させるため、これならば大丈夫であろうという線に沿って、そのリストを修正した。こうした方法によって、王党左派の指導者パローの名前が名簿から削除されたり、ルドリュュー・ローランの名前がつけ加えられたりした。群衆の要望が満たされたと思われた時、連絡員がパレ・ブルボンに派遣され、『ナシヨナル』紙の事務所にはいなかったが、閣僚に選出された人々に、「あなたはフランス政府員に選ばれました」ということを伝達した。

② ジャコバン派（急進共和派）

ジャコバン派、すなわち急進共和派は、彼らの大新聞『レフォルム』紙の編集室であわただしく別の閣僚名簿を作成した。その名簿には、『ナシヨナル』紙が全く独自に選んだ人々が、大半含まれていた。ただ、ルイ・ブランとアルベールは二人は入っていない。ルイ・ブランは当時、フランスで最も著名な社会主義者であった。またアルベールは労働者であり、パリの労働者階級の間で大変人気があった。

③ ティエールとパロー

『ナシヨナル』紙と『レフォルム』紙の共和派たちが、編集室の窓の下の群衆に助けられながら、フランスのために閣僚を検討している間に、代議院では審議が始まり、国王の退位によって、新たな局面を迎えた事態の進行について話し合いがなされた。議員の多くは、摂政が好ましく、ティエールとパローが主導する政府がよいとの意見を提出

した。ティエールならば彼らは信頼できた。というのは、彼は一八三四年、リヨンでの労働者の暴動を鎮圧したからである。パローは、議会関係者の間で一般に受け入れられていた意見によると、権力を分担する資格はもっている、という。彼は王党左派の指導者であり、改革宴会運動の発案者であった。その運動が、ギゾーの退陣と国王の退位をもって終了したので、この危険な野党の指導者には、報酬を受ける資格があった。パローは代議員たちにはよく知られていた。彼は、政治的に尊敬されるか否かきわどい所に位置していた。代議員たちは、彼より左にあるものはずべて、フランスにとって破滅をもたらすであろうと考えていた。しかしパローは、我々がみてきたように、『ナシヨナル』紙の編集室の外にいた群衆からは支持されなかった。彼は、穏健共和派の支持者からみれば、あまりにも右側に位置していたのである。

代議員たちには、フランスの将来を決定することは許されていなかった。反乱者たちはパレ・ブルボンに侵入すると、共和的な臨時政府の樹立のみが自分たちの希望であると公言した。彼らは、ティエールによって率いられた政府など眼中になかった。ティエールこそ、一八三〇年には共和派を出しぬき、一八三四年には労働者たちに発砲した人物であったからである。代議員たちは、自分たちにはなすすべがないことがわかり、静かに散会し始めた。その時ルドリュ・ローランは、群衆に向かって、『ナシヨナル』紙によって準備された名簿を読み上げた。そして彼らに、ついでくるようにいと、市庁舎へ向い、新しい政府の準備にとりかかった。

(3) 臨時政府の成立

一八四八年までに、フランスは革命が成功したあと、人々がどう行動すればよいかという手引書ともいべき先例を作り上げていた。新臨時政府が、市庁舎で設立宣言を行い、市民に対して新出発の声明を発表しなければならなかった。

『ナショナル』紙が準備した名簿の人々がまず市庁舎に到着した。次に『ナショナル』紙の名簿にはなかったが、『レフォルム』紙の名簿には掲載された二人の人物がやってきた。入閣したいとの二人の要求は、先着者たちによって、正当な理由がないと拒否された。しかし最終的には、ひとつの妥協がはかられた。後から参加した二人は、臨時政府の秘書官として働く、但し完全な顧問権をもつ、ということと合意が見られた。もし二人が排除されたならば、市庁舎の外にいた群衆たちは黙っていなかっただであろう。

臨時政府は決して統一された機関ではなかった。政府は権力を掌握して数時間のうちに、すぐに共和国を宣言すべきか、それとも、まず国民に相談すべきか、を決定しなければならなかった。大事なことは、学問的な問題ではなかった。宣言に基づいてまず決めるべきことは、労働者やジャコバン派が強力なパリのことをまず優先させ、次にフランスの残りの地方のことをやるということであった。まず国民に相談するということは、もし地方が望むならば、パリが行ったことを地方が拒否してもよいということを許すかどうかということの意味した。

穏健派は人民に相談することに賛成であった。もし人民が相談にあずかるということがなかったならば、共和派の掲げる民主的な原理はどうなってしまうのであろうか。急進派はすぐに共和国が宣言されることを望んだ。パリが決定したことをフランスは受け入れるであろう。革命を行ったのは、何よりもパリ市民たちである。彼らが最も望んでいることを認めないということは、無意味な挑発を意味する。ただ穏健派の方が多数派であった。

しかし両派とも、討議の結果、街の群衆は共和国の樹立を強く望んでいるということを知った。結局、両派が認められるやり方が見い出され、それは民衆の怒りを買わないように文書で宣言された。そこには、人民に諮問し、もし承認されるならば、臨時政府は共和国を希望する、と謳われていた。民衆はこの宣言を、共和国の声明とみなして満足した。

(4) 二月革命にみられる特徴

私は、二月の四日間の出来事に限って少し詳しく記述してきた。私としては、この四日間にパリでたまたま起こった革命が、どのような種類のものであったのか、明確にさせておきたかったのである。この革命については、とくに留意しておかなくてはならない三つの「真理」がある。第一に、政治指導者たちはだれもその革命を推進しなかったということ。革命が成功したあと、彼らはその主導権をとっただけである。彼らはだれも、実際にパリケードを作った人々と、身近に接触しなかった。(ブランキならば人々と触れあつたであろうが、彼が解放された時は、戦闘はすでに終わっていた)。第二に、もしカピュシーヌ街の思わぬ事件が起こらなかつたならば、暴動は革命にまで発展しなかつたであろう、ということ。その突然の出来事が起こつたために、穏健派がギゾーの解任という自分たちの望みを達成したあとに、国民兵と反乱者たちとの激しい戦闘の展開ということになってしまったのである。第三に、臨時政府は、共通の目的のもとに団結するという同盟形態ではなかつた、ということ。それは少しでも多くのパリ市民を満足させるために作った閣僚名簿に、たまたま名前が掲載された人々の集まり、といつてもよかつた。出発当初から、この政府は二つの敵対する党派をかかえていた。すなわち、ひとつは、フランスがパリの独裁から、すぐにも自分たちを救ってくれるであろうと希望していた多数派であり、もうひとつは、フランスが自分の意志を表明する機会をもたないうちに、できるだけ多くの譲歩をパリに対して行つてしまおうと決めていた少数派である。

(1) 穩健共和派の讓歩

穩健共和派は、臨時政府内で七対四で多数派を形成していた。そして彼らは、地方が同僚のジャコバン派よりも、自分たちの方を味方してくれているということを知っていた。それでも彼らは、目下のところ自分たちの立場は必ずしも強力ではないと感じていた。フランスが何かいう前に、パリの人々の要求を拒否してしまうことはできなかった。そのため穩健派は、労働者たちに讓歩せざるをえなかった。穩健派は、ジャコバン派のコシディエールがパリ警察の警視總監になることを承認した。また内務大臣の地位を、やむなくルドリュ・ローランに讓った。国民兵の召集権は、内務大臣の専権であったので、これは大きな讓歩であった。コシディエールは、パリの秩序を維持するために労働者からなる特別な警察軍を組織した。

① 革命クラブ

ジャコバン派とより過激な共和派が、ルドリュ・ローランとコシディエール以外に頼りにしたものは、革命直後に現われたり、もしくは少なくとも日の目をみるようになった政治クラブであった。このクラブの中で最も強力なものは、ジャコバンの革命的なものであった。カベによって指導されていた「中央友愛協会」は、その平和的な共産主義によって、当時まだ広くパリの労働者たちの心をとらえていた。またラスパイユの支配する「人民の友クラブ」もあった。彼は絶大な影響力を發揮し、労働者に暴力を行使しないように訴えた。カベもラスパイユも、暴力については戒めたが、富裕階級の利己主義と傲慢に対しては容赦しなかった。たとえ彼らが、革命の必要性までは説かなかつたとしても、富については輕侮の対象として批判した。

さらに二つの重要な革命的クラブがあった。「中央共和協会」(一般に「ブランキクラブ」とよばれていた)と雄弁家クレオル・バルベスを有する「大革命クラブ」である。

これら四つのクラブは、まもなくフランスの脅威となった。というのは、穩健共和派と革命的新聞が、それらのクラブの活動について、恐怖心をあおる記事を書いたからである。このクラブのうちの三つは、臨時政府内のジャコバン少数派を支持していた。それに対してブランキは、フランスの再生を妨げるものは何であれ、すべて打倒したいと思っている左派の方に接近していた。ただこれらクラブは、臆病な人々が思っていたほど恐ろしいものではなかった。

これらクラブの影響力があつたのは、パリだけであつた。これらクラブは、地方の町に現われ始めた、自分たちに似た結社と強力な連帯を結ぶことはできなかった。これらクラブは、一七九二年から四年にかけてジャコバン派が行つたような、フランス全土の急進的な少数派を指導したり、鼓舞したりするようなことはしなかった。彼らが力をもつていたのはパリだけであつた。パリで彼らは、穩健派が当初無力なため、抑圧できなかった暴動を扇動したりした。もしロベスピエールやマラーのような指導者がこれらクラブを指導したならば、これらは危険なものになつたであらう。穩健派にとって幸運なことは、革命家の中で最も有能なブランキが、たんなる陰謀家であり反乱者にすぎなかつた、ということである。パリで人気のあつた新政府の二人の閣僚、ルドリュ・ローランとルイ・ブランは、自分たちの閣僚を脅かし罰するために、群衆をどのように利用すればよいかわからなかつた。彼らは公平に評価すると、群衆を利用する方法を知ろうともしなかつた。彼らは、労働者たちを利用するのではなく、満足させることに氣を使ったのである。

(2) 虚偽の譲歩

① リュクサンブール委員会

穩健派は、急進派と社会主義派に二つの重要な譲歩を行った。二月二五日、穩健派はすべての市民に仕事を与えることを約束する勅令を出すことに同意した。その約束を果たすために、すぐに国立工場をつくることが命じられた。三日後の二月二八日、穩健派は労働者階級の状態を報告し、その状態を改善する方法をまとめることを任務とする委員会を設立した。労働者の代表も参加するその委員会は、リュクサンブール宮殿で会合を開いたこともあり、今日では、リュクサンブール委員会と歴史上呼ばれている。

この二つの譲歩は、本当にその趣旨を実現するというよりも、多分にうわべだけという性格が強かった。臨時政府は、委員会の提言を必ず採用しなければならないというわけではなかった。その委員会は、ルイ・ブランが、政府がもし労働者のために何もしないというのであれば、自分は辞任すると脅したため、設立されたものであった。労働者はまだ武力をもっていたので、彼が政府に留まっているということは大切なことであった。彼が臨時政府の閣僚である間は、労働者たちも騒がないであろう。もしブランが労働者たちを扇動したならば、労働者たちの収拾はつかなくなる。穩健派たちは、リュクサンブール委員会は、おしゃべりのための店であればそれでよいと思っていた。そうすれば、そこで社会主義派は、たがいに耳が聞こえなくなるほど喋り続けて飽きてしまう。かくて平和が保たれる。社会主義派はエネルギーを使い果たし、声の訓練だけで終るであろう。社会主義派が何の力も発揮せず、ただ時間を浪費しているにすぎない姿は、事情の知らない人にとっては、ある意味では不可解であろう。

② 国立工場

国立工場は、労働者の飢餓を防ぎ、彼らが暴動を起こさないようにするための施策であった。国立工場を管理運営したのは、リュクサンブール委員会ではなく、公共労働省であった。その大臣マリは、穩健派の中でも最も穩健で、

ルイ・ブランの理論を実行するつもりなど全くなかった。実際、工場は存在しなかった。労働者たちは、各地の役所から失業証明書をもらうだけであった。その証明書をもって指定された窓口にいけば、土手づくりか他の仕事を手伝うように指示された。あるいは、何の仕事をしなくても、一人一フランを握らせられた。そこは施し物を求めたり、えたりする場所ではなかった。国立工場は、ルイ・ブランが提唱したような、社会主義的工場とは似ても似つかぬものであったのである。ルイ・ブランの考えた工場は、有利な条件で私的資本家と競争できる、国家の援助を受けた効率的な生産者たちの協同体であった。

国立工場が設立されるとすぐに、技術者エミル・トーマスは、マリを説得して、半軍事的な形で労働者を組織する計画を採用させた。その全組織は、パリの労働者階級の地区の外につくられた中央指令部の指示によって動くようになっていた。中央指令部は、労働者たちを広く分散させ、与えられた仕事があまり彼らの家の近くにならないようにくわだてた。エミル・トーマスは国立工場の責任者に任命された。その際彼は、自分の部下として「技術製造中央学校」のかつての学生たちを雇うことを認めてもらった。パリの労働者たちには、自分たちの先輩からアドバイスを受けるという習慣が長い間あった。彼らは、仕事の面では腕の良い、それら若い技術者たちが、かつて法律の学生たちによって自分たちに加えられた損害を治してくれるのではないかと期待した。

政府には、それらまじめな若い技術者たちが、国立工場をどのようににしたがっているのか理解できなかった。彼らの中の何人かは、社会主義は失敗であったということを証明するために、国立工場が無駄であり、効果がないようになることを望んでいた。またある人は、労働者たちが扇動的な政治活動に走らないようにするために、その工場をもっと活用すべきであると考えていた。エミル・トーマスは、穏健な共和派であったが、彼自身は効率性を重視していた。すなわち彼は、工場が社会主義的ではないことを知っていた。彼は、労働者をしっかり働かせたかった。しかしマリは、トーマスが必要としていた援助を与えなかった。トーマスの必死の努力にもかかわらず、国立工場の効率

はあがらず、人気もなくなっていった。だが国立工場が、五月末までの三ヵ月間、多くの労働者たちを政治から遠ざけていたことは事実である。

③ 国立工場の効用

三月一七日、四月一六日、五月一五日、政府に圧力をかけるために革命的なクラブがデモを組織した時、国立工場の労働者たちはそれに加わらなかった。そしてトーマスと彼の若い技術者たちが、労働者に対する影響力を失い始めた時、政府が握っていた軍事力と政治力は、二月の時よりもはるかに強大になっていた。私は、国立工場については、もしそれが効率よく作動していたならば、六月暴動は起こらなかったのではないかといえると思う。そしてまた、国立工場がなかったならば、革命家は、政府が革命家たちを阻止する力をもたないうちに、権力の奪取に成功していたのではないかと考える。

というのは、一七九三年から九四年にかけてのジャコパンとコミューンの例を模範として、革命家たちは、自分たちが政府を脅かしたと思う時には、すぐに暴動になるような示威運動を組織していたからである。クラブが主要な部分を占めたりユクサンブル委員会の手援によって、その示威運動は成功したり失敗したりしたが、その成否によってパリにおける穏健派と共和派の力関係もまた、右によったり左によったりしたのである。例えば三月一七日の示威運動は、左派の勝利であった。左派が勝ったということは、自分では武装や装備できない人々を、国民兵に入れることによって、国民兵をもっと人民的なものにしようとする左派の計画に反対する中産階級に対して、政府を鼓舞して中産階級の意図をくじこうとすることを意味していた。あるいは言い換えると、政府内の急進派を扇動することにより、穏健派の場合はあっさりと降服してしまいそうな圧力に対して、自分たちは絶対に屈服しないと主張することを意味した。

④ 三月一七日のデモ

三月一七日は、左派にとっては払った犠牲の割には利益の少ないピュロス王のような勝利であった。政府には、新しい軍団兵を装備させるだけの資金的な余裕はなかった。そして六月、労働者が決起した時、国民兵はほぼ二月の時と同様に、中産階級からの参加者によって構成されていた。パリの国民兵が労働者のものになるには、一八七一年までまたなくてはならなかったのである。

⑤ 四月一六日のデモ

次の力による試みは、四月一六日のデモであった。それはリュクサンブール委員会とクラブが合同して行ったものである。それを準備した人々には、二つの目的があったように思える。第一に、政府にもっと労働者のためになることをするように働きかけたかったこと。第二に、選挙を延期させたかったことである。革命派は、選挙をすれば自分たちが不利になるということを知っていた。彼らは同盟を強化し、宣伝に力を入れ、政府から具体的の中味のある譲歩を引き出すため、時間をかせぎたかった。革命派は、どんなに選挙が延期されようとも、自分たちが多数派になるというようなことはないという自覚していた。しかし彼らには、力のある少数派にはなれるとの自信があった。また、ひとたび労働者に実質的な譲歩がなされれば、それを反古にすることは難しいだろうと予測していた。

四月一六日の示威運動は失敗に終わった。ジャコバン派の領袖で、内務大臣としての力を発揮していたルドリュ・ローランは、国民兵を召集し、デモ隊が臨時政府の中心地である市庁舎へ向かうのを阻止した。そのために、クラブに対する最初の勝利を穩健派に与えたのは、急進派の指導者であるということになった。ルドリュ・ローランは、なぜ彼の敵に有利になるようなことをしたのであろうか。左翼的な歴史家のなかには、彼は本質的にはブルジョアジーであったので、いざという時には、自分の階級と運命を共にしたのであると指摘するものもいる。

しかしほんの数日前には、ルドリュ・ローランは、労働者の暴動が穩健派を政府から追放しようとするのを助ける

画策をしたのである。総選挙を行えば、穏健派と保守派が圧倒的多数を占めるだろうということをも最もよく知っていたのも彼であった。彼は、もし強固な穏健派を突き崩すような暴動が起これば、それは憲法制定議会が選出される前であって、それ以後ではないと主張した。約二〇年間、普通選挙制の信条を訴えてきた人々が、人民から選出された代表に反対して、暴動を起こすようなことはできないはずである。しかし、ある暴動の産物である臨時政府が、他の暴動によって形を変化させられないという保証はない。以上がルドリュ・ローランの考えであった。

では、なぜ彼は四月一六日のデモに対して国民兵を召集したのであるか。おそらくその理由は、彼が、新しい暴動が起これば新たな危険に見舞われるであろう、と懸念したのである。また、おそらく彼はブランキを信用しておらず、ブランキをパリの支配者にするようなことはとてもできなかったであろう。このことの方が、ローランにとっては重大な問題であった。彼の動機がなんであれ、彼の行動によって、ジャコバンと革命派の両方が、労働者に対してなされた本当の譲歩の背後に自分たちの安全な場所を確保することができるようになり、そのために、彼らとブランキが一線を画すようになったのは確かであった。その結果、穏健派は、自分たちが絶対多数派であるということが明確になった時、あえてジャコバンや革命派を追放するようなことはしなかったのである。ただリュクサンブール委員会と国立工場は、社会主義者に対する一時的な譲歩でしかなく、反動の最初の風が吹いた時、それは吹きとばされる運命にあった。

(3) 憲法議会選挙

① 穏健共和派の勝利

四月末に行われた選挙は、穏健共和派の勝利であった。九百議席中、同派は五〇〇議席を獲得したのである。ジャコバン派は一〇〇議席しかなく、他の三〇〇議席は自ら共和派となる人々が占めた。当時はだれもが共和派と名乗

る傾向にあったが、しかし実体は、オルレアン派かまたは正統王党派であった。彼らはのちに党派を形成し、秩序党として知られるようになった。我々はここでは、便宜上それを保守派とよぶことにする。

五月四日憲法議会が召集された時、臨時政府にかわって五人のメンバーからなる閣僚委員会が設置された。五人のうち四人は穩健派で、五番目はルドリュ・ローランであった。このようにして急進派の指導者は、四月一六日の彼の行動に対する報酬をえたのである。

穩健共和派は選挙ではうまくやった。というのも、同派に権力を与えた革命は、まだ二ヵ月しかたっていないからである。穩健派は成功の威信をえた。彼らは、その革命の継承者の中でもっとも保守的であるといってよい。フランス国民がよく知っているように、彼らは、急進派や革命派が権力を握るのを阻止するために最善を尽した。その結果、教会の支持すらえるようになったのである。

② 教会の共和派への接近

教会の味方は次から次へと破綻していった。教会は最初は極端王党派に全幅の信頼をおいた。次にオルレアン派に期待した。ところが、旧王党派は両派とも思いもかけず弱体化しているということに気がついたのである。教会は今や、強力で、しかも人々から慕われている他の味方を捜さねばならなくなった。そうした中、教週間のうちに、穩健共和派がそうではないかと考えるようになった。その決定を下すのに困難はなかった。というのは、モンタランベールに率いられたカトリック党が、すでに多くの善良なキリスト教徒たちに、教会への献身と、すくなくとも大革命から受けついで原理のいくつかを受け入れることとは相対立するものではない、と説得していたからである。

ローマ法王はずっと以前に、ラムネは異端者であると決めつけた。しかし、僧たちは認めようとしなくても、穩健共和派が今や教会の支持をえられるようになったのは、ラムネの力があつたことは間違いない。最初に人々に、教会は革命はやむをえないものとして承認しなければならぬ、と説いたのは他ならぬラムネである。一八三四年にグレ

ゴワール一六世は彼を非難し、ラムネのカトリックの同僚たちも、本分を守って彼を見捨てたのである。

しかしそうした同僚たちも、今や、注意してあまり力説することはしなかったが、ラムネの信条を自分たちの説教の中に取り入れるようになった。そこには、ローマを最大に侮辱することになる教会と国家の分離という原理も一部含まれていた。ローマ法王も、こうした風潮を阻止しなくなった。モンタランベールと態度を少し和らげていたカトリック党は、人民の権利は否定しなかったが、暴動は非難した。また彼らは、すべての自由を賞賛したが、なかでも教会にとって最も有用な、二つの自由の原理である私的教育権と結社権については、それを守るために最善の論陣を張った。彼らは決して共和派ではなかった。しかし、一四年のうちに、かなり多くの善良なカトリック教徒たちに、反動の原因はつねに教会側に責任があったわけではない、と説得することに成功していた。一八四八年四月には、多くの人々は、彼らの主張は正しいと信ずるようになっていた。教会のこうした新しい動きは、そう長く続くことはなかったが、教会のこうした動きは、上品な階級の人々が、穏健共和派に好意をよせるようになるうえで、大きな貢献をなした。それゆえ保守派が、四月に選挙で大勝利した時、彼ら自身でさえ自分たちを共和派とよぶことは時宜を得たものであると考えたほどであった。

(4) 極左の行動——五月一五日事件

憲法制定議会の選挙は、極左にとっては大打撃であった。彼らはこうした事態を、必然的事象として黙って受け入れたわけではなく、国民に対して、力で自分たちの意志を示そうとした。五月一五日、彼らはデモを企画した。その表向きの目的は、ポーランド人を救うために、ロシアに反対するよう議会に請願することであった。議会は、人民の大きな団体が、公けの請願を直接提示することを禁止する決議を行っていた。デモ隊はこの決議を無視することに決めた。クラブの革命家に指導されて、デモ隊は議会に乱入し、それを解散させた。そして、急進過激派と改革派だけ

からなる新臨時政府の閣僚名簿を起草した。さらに慣例に従って、彼らは新政府を宣言するために市庁舎へ向かって行進しようとした。だがその途中、国民兵が彼らの行く手をさえぎり、彼らを解散させた。暴動の首謀者であるブランキとバルベは逮捕された。そしてジャコバン派の警視總監コシディエールは、とくに明確な罪状はなかったが、無理矢理その地位から辞職させられた。ここに二月以来はじめて、政府の手に指導権が握られることになったのである。

五月一五日の事件は、ブランキにその責任が負わされる結果になったが、それは重大な誤りであった。革命が成功した後、人々の支持をえた革命のほこ先をかえてしまったパリの労働者たちに対して、フランスが懐いていたすべての善意は、たちまちのうちにすべて消滅してしまった。今や「赤」とよばれるようになったパリの労働者たちは、独裁制を打ちたてて、人民議會を破壊しようとした。彼らはフランスを危機に陥れ、かつそれを侮辱した。多くの善良で、臆病な人々は、「赤」の人々の陰謀に、そろそろ終止符を打たねばならないと考え始めた。

(5) 国立工場の閉鎖

五月一五日以降穩健派は、フランスは社会主義者と革命派によって、急激に脅かされ悩まされるようになってきているので、それに対抗するためには、いかなる措置をとろうとも許されるであろう、と考えるようになった。彼らは国立工場を閉鎖することにした。社会主義的な歴史家は、「国立工場の廃止を決定した時、穩健派はそれによって労働者の反乱を誘発しようとした。そうすれば軍隊によって、軍事的社会主義を一掃できるからである」と指摘する。自分は、これら社会主義的な歴史家以上に、穩健派の嫌う人民の心を見ぬいているのだと主張する人は、だれもない。しかし、実際の証拠だけを重視する我々としては、もう少し慎重である必要がある。穩健派は、国立工場を廃止すれば暴動になるだろうということは知っていた。ただ彼らが、暴動を誘発しておいて、労働者たちを一掃してしまうおうと考えていたかという点、そこまでの根拠はない。国立工場は、急進派と社会主義派の要請によって穩健派が開

設、運営してきたものである。国立工場は費用がかさみ、効率が悪いことで悪名高かった。穩健派が実権を握るようになってから、彼らは常々無駄であると考えていたものを抑制することに決めた。これが国立工場廃止の理由である。

エミル・トーマスは、政府に対して廃止は暴動を促すことになるであろうと警告した。彼の警告には、一応の効果があった。五月二六日、彼は解任されたが、国立工場廃止の最終決定は、六月二一日まで延期されたのである。その日、国立工場に登録している二五歳以下の青年は、軍隊に所属するように、また、地方に行つて働く用意があると思ふ人はそうするように、と命ずる布告が発令された。労働者の代表が公共労働大臣マリを訪ねた時、彼は代表団に布告は守らなくてはならない。もし必要ならば、力に訴えてでもそれは実行されるであろうと告げた。

翌六月二三日、ファロウが三日のうちに国立工場の廃止を実行したらどうかとの提案を行った時、彼は同時に、向こう三ヵ月間、労働者に一日一フランを支払う、また、三百万フランの補償金が他の人々にも払われる、との案も含めた。そしてついに暴動が勃発した時、議会はできる限り沢山の労働者が暴力を振わないようにとの配慮から、暴動に加わらなかつた労働者には、ファロウの提案通り、手当を支給することに決定した。

労働者たちは、六月二二日の夕方、バリケードを作り始めた。しかし、翌日まで彼らは攻撃を受けなかつた。この遅れこそ、政府当局が、暴動が拡大し激しくなつていったならば、軍事的社会主義に、強烈かつ致命的な攻撃を加えようと狙っていた唯一の重大な証拠である、との説がある。しかし、その遅れの理由については、もし我々が、政府が労働者を鎮めるためにとつた他の方法ではないかと考えた場合、その方が説得力をもっているのではなからうか。警察と軍当局者は、二月革命で成功したのは、バリケードが作られるや否や、軍隊がそれをこっぴどみに打ち砕いてしまったからである。バリケードは取り除かれ、団結した包囲攻撃は不可能となつた。その結果、鎮圧が効果的になされたのである」と信じた。おそらく彼らは、今や「最善の政策は、できるだけ多くの労働者を買収することであり、そして、闘争に固執する人々は完全に打ちのめされるといふことをわからせることである」と考えたのであろう。

(6) 六月暴動

一九世紀の労働者の暴動としては、第二番の大きさである六月暴動は、三日間続いた。闘争は激しく、数千名の人々が命を失った。国民兵は労働者に本気で立ち向かった。すなわち、プロレタリアートと下層中産階級との間の二月同盟は、今や破局を迎えたのである。もっとも有名なジャコバンや社会主義派、また革命派の指導者は、だれも暴動には関与しなかった。ブランキとバルベは獄中にいたし、ルドリュ・ローラン、ルイ・ブラン、そして彼らの仲間たちは、暴動とは何のかわりももっていなかった。穏健派と保守派は、もし可能ならば、何が自分たちに反対しているのか、よろこんで証明してみせたであろう。警察当局が知りうる限りでは、その暴動には指導者はいなかった。それは、フランスの新しい支配者に対する怒りが爆発したものであった。労働者が、暴動によってえようとしたものは何かということについては、説明しにくい問題である。

六月暴動失敗の余波は、フランスだけではなく外国にも及んだ。それは、ヨーロッパ中の反革命派に勇気を与えた。フランスの地方では、最初の革命以来、最も大きな「赤の恐怖」をよび起こした。憤慨したブルジョアジーと、棒切れで武装した農民の団は、革命家たちをしらみつぶしに搜した。あらゆる所で善良な市民たちは、徹底して復讐しようとして決意したのである。

第三節 保守派の継承（一八四八年六月—一八四九年六月）

(1) 共和派の衰退

五月一五日のクーデタと六月暴動の失敗は、一方の穏健共和派と、他方のジャコバン、社会改革派また革命派との間の不安定な同盟を破綻させてしまった。革命派は破れ、追い散らされた。投獄されたり、国外追放になった。隠遁

するものもいた。脆弱であるにもかかわらず、五月一五日にはあたかも強力であるかのように行動した革命派は、フランスを恐怖に陥れ、支配しようとした。その結果フランスは、おどおどした、復讐心に富む理性的でない国になってしまった。しかもさらに、ブランキが権力を狙ったあとに労働者の暴動が起こった。フランスは、二月が最も説得に服しやすかったし、おとなしかった。その月フランスは、まるで新しい日を迎えたかのように目覚めたのである。何がもたらされるのか、わからなかったが、希望に満ち溢れていた。当時教会でさえ、進歩を信じているかのようであった。それ以来四ヶ月もたたないうちに、すべてが変わってしまった。この変化の原因は、ひとえに共和派にあった。彼らは、政治の舞台を一人占めしているかのようにであった。彼らは互いに相争い、殺しあつたのである。だがそれ以後、新しい登場人物が舞台にどっと押し寄せ、共和派はすべて、舞台から追い出されてしまうことになるのである。

① 保守派との駆引き

一八四八年六月末、革命家たちはまるでうちのめされてしまったかのようにであった。急進派は脇へ追いやられ、穏健派が勝ち誇っているかのように見えた。六月暴動の間、執行委員会は活動を中断され、緊急時における絶対的な権力が、穏健共和派のウージェヌ・カヴェニャックに与えられた。緊急時が過ぎても執行委員会は再開されず、カヴェニャックは独裁者の地位は降りたが行政の長に任命され、フランスの新憲法が制定されるまで、その立場に留まった。彼はフランスを六ヶ月間統治した。彼は結局、ルイ・ボナパルトが大統領になるまでフランスを統治したが、彼の閣僚たちはすべて穏健共和派であった。

しかし権力は、すでに共和派から遠ざかりつつあった。教会が共和派を見捨てた。憲法制定議会は、五月一五日のブランキ派のクーデタと、六月暴動の前に選出されていたが、もはや人民の意向を反映していなかった。フランスはすでに、自分たちが一番最近選出した代議員たちよりもはるかに、共和的ではなくなっていたのである。しかもその

代議員たちも、右寄りになりつつあり、フランスは極めて右傾化していた。

議会が初めて召集された時、それは圧倒的に共和派の団体であった。議会内の保守派も、共和派が主導権をとってもそれは当然であると思った。六月事件以来、かなりの数の穏健共和派が保守派へ、秩序党へと移った。その保守派は、近年の選挙中に自分たちの行動原理をひそかに用意していたとはいえ、それは民主的なものではなかった。彼らは普通選挙も、穏健な社会改革すらも信じていなかった。彼らはまさに王党派であったのである。

大部分がオルレアン派であり、彼らは、保守派が共和的になることは避けられないとわかった時、共和派を最大限利用しようと決断した。彼らは財産家であった。六月暴動以前は、彼らが主導権をとることなどは、全く不可能であった。しかし今や、彼らは自信にあふれた。保守派は責任のある地位は穏健共和派の指導者たちに譲った。そしてそれら指導者たちが、ぎこちないがまだ活気のある共和的な原理を信奉することによって自由を味わったのと同じ位の速さで、今度は、その原理に反するように仕向けたのである。

以上の経過から、最初の反動的な法律に対する責任は、保守派に支持された穏健派にあったといえよう。一八四八年七月二八日の布告は、クラブの自治権を否定した。また秘密結社も禁じた。さらに、一般の人々に公開されない政治集会は、当局の許可をえない限り開くことはできないとされた。この布告の結果、クラブはやむなく一般の人々にも公開されることとなり、警察官の立ち入りも自由となった。討論の内容や決議はすべて記録され保管された。また、公共の秩序や道徳に反する提案はすべて禁じられた。その布告が議会で討議に付された時、公共の秩序の中には、家族と私有財産の保持を含むということが明らかにされた。

八月に制定された二つの法律は、出版物に対する新しい規則を設けていた。新聞の編集者は、再び保証金を支払うように義務づけられた。一方、議会や共和国に対する侮辱は、家族や私有財産に対する攻撃と同様に、出版物違反とされた。二月革命のあと、行政の責任ある立場にいた役人たちがその地位を失ったので、これらの法律は、起草した

人たちよりももっと保守的な人々によって施行されることになった。急進派、社会主義派、革命派たちは、自分たちの最も効果的な政治的手段を奪われてしまったのである。

② 穩健共和派の脆弱化

穩健共和派は、農民や財産家たちが革命に反対するようになると、ますますその力を失っていった。彼らは最初は人気があった。というのは、彼らの穩健さと礼儀正しい振舞いは、彼らの味方である左派に対しても、同じような良い行動をするのであろうとの保証を与えていたからである。穩健派の不器用さ、ジャコバン派の優柔不断さ、革命派の無謀な戦術などがパリを内乱に追いやるや否や、二つの極端派が、中間派を犠牲にして影響力を増大させていくということは当然のことであった。

だが、穩健派が脆弱になったことを説明する理由は他にもある。三月に臨時政府は、国家財政を建て直すために、四五%の直接税の増税（四五サンチーム税）を行うという布告を出した。この不評をかった布告は、あまりにも発布されるのが遅かったため、四月の選挙の投票に影響を与えることはなかった。しかし後になって、増税分が課税されるようになる、人々の怒りは高まり、その責任は穩健共和派に向けられた。共和制はフランスに何をもたらしたのであろうか。パリの内乱と直接税四五パーセントの増税が、保守派は、共和派のような信用を失墜した人々に対して、余裕をもって毅然と臨むようになったのである。

なお穩健共和派には有力な指導者がいなかった。カヴェニャックは誠実であったが、秩序党の党首ティエールほど聡明ではなかった。ルドリュ・ローランのような扇動的なアピール性ももっていなかった。彼は保守派に多くの譲歩をしたので、急進派の怒りを買うことになった。しかも、保守派の信頼もかちとれなかったのである。保守派はカヴェニャックを利用できる間は、彼に対して寛大であった。しかし、時代の流れは早く、いかなる共和派といえどもそれに追いつくことはできなかった。カヴェニャックの利用価値がなくなった時、保守派は彼を見捨てたのである。

穩健派を弱体化させたものが、今度はジャコバン派に力を吹き込むことになった。ジャコバン派の指導者たちは、五月一五日にブランキ派を、また六月暴動の時には労働者たちを、助けるようなことはしなかった。また四月一六日、ルドリュ・ローランは、クラブから政府を守るために、武力行使をした。そのため革命派と労働者たちは、彼に感動する理由をもたなかった。それでもなお、反動が始まると左派はすぐ、彼のもとに集まった。その時は彼も、労働者たちの弾圧には加わらなかつたし、むしろ彼らを見逃した。彼は暴力を阻止しようと努力し、議会が取った過酷な措置にも抗議した。彼が労働者たちに対して深い同情の念を懐いていたことは疑いない。六月事件のあとには、彼は労働者の利益を代弁しようとした。彼は、そのようなことができるフランスに残された最も重要な人物となったのである。

彼は、保守派に断固と反対した。彼は反動を妨ぐことはできなかったが、反動派には徹底して対抗した。それが功を奏したのか、かなりのフランス国民が、共和主義や社会改革へと考え方を変えていった。一八四八年三月と四月、かなりの数のフランス人が、共和主義的な主張に好意をもつようになった。だがそうした人々は、共和主義とは何かということを知らず、まもなくそれを放棄するものもいた。一八四八年六月以後、ジャコバン派に加わった人々は、こうした共和派とは様子が違っていた。彼らは、共和国の敵を嫌うことを身につけた、忠実な黨員となったのである。六月以前には、必ずしも親密とはいえなかつたジャコバン派と社会主義派は、逆境の中でいつしか団結しなければならぬということを学んでいった。両者の同盟は、九月二二日に開かれた宴会で証明された。さらに、憲法議会には、活動的な四種類の社会主義派がいた。ビクトール・コンシデラン、フリーエ主義者、ピエール・ルロウ、そして、かつてサン・シモン派のメンバーであったルイ・ブランとブルードンである。このように見てくると、一八五一年一月、ルイ・ボナパルトが第二共和国を破壊した時、フランスにはそれ以前に比べて、じつに多くの本当の共和派がいたということがわかるし、そのことは少しも矛盾ではない。簡單明瞭かつ重要な真理であるとさえいえよう。なお

ルドリュ・ローランの人生のうちで、最も実り多く、おそらく最も気高かった時期は、一八四八年六月以後に始まったといつてよい。その時から彼は、自分に対して強くなってきた反動的な運動に対する闘争を開始したのである。

(2) シーザー主義への道

一八四八年六月から一八五一年一二月にいたるまでの三年半は、シーザー主義にいたる過程のいくつかの局面を包含している。第一段階は、六月からルイ・ボナパルトがフランス大統領に選出されるまでの間であるが、ここでは、穩健共和派と保守派がクラブを害の無いものとするとともに、出版物を規制した。第二段階においては、保守派と大統領がジャコバン派を倒すために協力した。第三段階では、大統領と保守派が、ジャコバン派を弾圧しながらも、やがて両者が徐々に敵対関係に入ってしまった。そしてついに、一八五一年一二月二日、ルイ・ナポレオンは自分自身をフランスの唯一の支配者にしたて上げたのである。革命派、ジャコバン派、そして保守派はすべて弾圧されたか、もしくは巧妙に出し抜かれてしまった。革命直後には、極めて強力であった党派、穩健派だけが残ったが、それもまた、自然のうちに骨抜きにされてしまったのである。

穩健共和派は、もし自分たちがどうすればよいかということがわかっていたならば、おそらく彼ら自身と、彼らの信条である穏やかな革命とを救済することができたかもしれない。彼らは国立工場を効果的に運営したであろうし、その結果、ブルジョア階級や農民を、自分たちと和解させることに成功したであろう。そうすることによって、穩健派はパリの革命派とジャコバン派の影響力を弱められたのである。彼らは、四五サンチームの増税があまりに不人気なため、徴収できないということを知った時に、それを撤回したかも知れない。穩健派は違った憲法を制定し、ルイ・ナポレオンが容易に勝利をえることを阻止することもできたのである。彼らは憲法議会で多数を占めていたし、彼らの中の何人かは、大統領の直接選挙は危険であると予測していた。そのうえトックビルも、憲法起草委員会で彼ら

に、その危険性について警告していたが、結局穩健派はその委員会で、「大統領は人民によって直接選出される」という提案が可決されるのを承認してしまった。ただその票数は、過半数をわずかに上回ったにすぎなかったが。

(3) ルイ・ナポレオンの登場

ルイ・ナポレオンの選出は、一八四八年二月二〇日、発表された。彼は投票総数のうち四分の三を獲得した。カヴェニャックは五分の一にも満たなかった。ルドリュ・ローランは二〇分の一をえただけだった。もっとも当時の人たちは、彼がそれ以上の票をえられるとは思っていなかった。ともあれ、六月暴動を鎮圧したフランスの「救世主」、カヴェニャックの全面的な敗北であり、それは驚くべき事件であった。穩健派は、議会ではまだ多数派であったが、カヴェニャックの敗北により、彼らは事実上実権を失うことになった。憲法議会がその任務を終るとすぐに行われることになっている立法院の選挙では、穩健共和派はその議席のかなりを失うことを覚悟しなければならなかった。

他方保守派は、自信に満ちていた。彼らはルイ・ナポレオンの立候補を支持していた。もし彼らのなかで、この政策の賢明さを疑うものがいれば、その人はティエールによって力づけられることになるであろう。ティエールは、偉大なナポレオンの甥は、彼の伯父とは似ても似つかない、あまりにも愚かである、といていた。そのティエールには、ルイ・ナポレオンを操縦できる確信があった。そしてボナパルト家の威信を利用して、共和派を打倒してしまおうと考えていた。この政策はじつに巧妙なものであった。

ルイ・ナポレオンは、保守派が自分を支持してくれることに対する見返りとして、もし自分が大統領に当選したならば、次のことを守ると保守派に約束した。即ち、クラブに反対する法律を維持する、パリに五万の軍を駐屯させる、フランクフルト国民議会を承認することを拒否する、イタリア共和派に反対し、サルジニア国王を支持すると。ティエールは、その取引は仲々名案であると評価した。二度も物笑いの種になり、借金で生活をし、自分のために協力し

てくれる友人や新聞が殆どいない、このような人物がなぜ危険分子になりうるのであろうか。パリの社交界ではルイ・ナポレオンは全く目立たない存在であった。彼は將軍でも革命家でもなかった。長い間外国で生活をしてきた。ティエールのような経験豊富な政治家から見ると、ルイ・ナポレオンのような人物は、ボナパルト家の中で鈍感で静かな人たちよりも、はるかにやり手であると思えたに違いない。ルイ・ナポレオンは、選挙で勝利を収めた。その原因は、農民やかなり豊かなブルジョアジーたちが彼に投票したからである。彼はまた、少なからぬ急進派や革命派からも支持を受けた。急進派がルイ・ナポレオンに投票したのは、カヴェニャックを権力から遠ざけておくのに必要なルドリュ・ローランやラスパイユへの票を無駄にしたくなかったからである。

(4) 大統領ルイ・ナポレオンと議會

ルイ・ナポレオンは大統領に就任すると、すぐに穩健共和派の内閣を廃止し、保守的なそれに変えた。彼の最初の首相はオディロン・バローであったが、政府の背後にある実権は、ティエールの手に握られていた。大統領とその閣僚たちは、憲法議會に終止符を打つための努力をした。彼らはいかに弱気になっているとはいえ、依然として共和派的な色彩を色濃くもつ議會を通してでは、フランスを思うがままに統治することはできなかった。議會は、完成まであと一年を必要とする立法計画をたてていたが、政府は解散権を武器に議會を脅して、審議を五ヵ月間で打ち切らせってしまった。フランスは公的には共和国であったが、政府は共和派の行う提案は、ことごとく共和国に対する攻撃とみなした。政府は、議會の多数派がまだ認めている制度の信用を失墜させるために、できることは何でもやった。実際それは、日毎にやりやすくなっていた。というのは、行政部や警察は、服従の義務をただ大統領とその閣僚のみに負えばよかったからである。

カヴェニャックの時代、議會はオーストリアと対峙しているピエモンテを助けるために、イタリアへ遠征軍を送る

ことを承認した。すると政府は、軍隊にローマに入って、法王のために玉座を奪還してくるようにとまで命じた。この命令は、法律を逸脱しており、議会はそれに抗議したが、その抗議は無視された。この場合、議会对してその抗議を受け入れるように要請できる手続はなかった。議会の議員たちは、その侮蔑的な仕打ちに自尊心を傷つけられ、このような目にあつたことに驚きを禁じえなかった。大統領選挙以来、議員たちは国民に人気がないということとを自覚せざるをえなかった。議会は思慮深く峻厳なものなので、議会在が嘲笑をかうような争いに巻き込まれることは好ましくなかった。こうした観点から、議会は予算案を票決するとすぐに解散した。不名誉よりは死を選んだのである。とくにその死が政治的な場合は、なおのこと意味があつた。

(5) 立法議会選挙

立法議会の選挙では保守派が大勝した。しかし、保守派の勝利よりもはるかにフランスを印象づけたのは、かなりの数に上る急進派の得票であつた。七五〇議席のうち保守派は四五〇、ジャコバン派は一八〇であつた。これは驚くべき数字であつた。しかし、もっと驚くべきことは、五人が保守派に投票したとすると、三人が急進派に投票したことになるという事実であつた。ジャコバン派は、それ以前においてはフランスでは、それ程多くの支持者をもつていなかった。ジャコバン派の多くが急進派に投票したのは、彼らが急進主義に好意を寄せたからというのではなく、ルイ・ナポレオンとティエールを恐れたからであるといえよう。彼らの動機が何であれ、彼らは急進的な信条が危機に瀕したので、急進派に投票したのである。彼らは民主的な共和派の支持者であつた。(といふのも、フランスでは共和主義は、民主主義を意味していたからである。)とはいつても、彼らはたがいに強い絆をもつ友人というわけではなかつた。

以上の点を考えると、選挙の結果は保守派の勝利というよりも、「赤」に対する恐怖であつた。ジャコバン派はパ

りだけではなく、西部と北部を除くかなりの都市でも過半数を制した。彼らはまた、はじめて農村部でも勝利を収めた。もっともそれは、最初のうちだけであった。だが、たとえ最初のうちだけとはいえ、このようなことが起こったこと自体、有産階級にとっては脅威であった。また農民に感染の恐れがないとしても、フランスに何が起こるかは保証できなかった。軍隊でもまた、急進派に対する支持が見られた。フランスのある部分だけに限定されていた病が、今やいたるところに広がり、有産階級がつねに健康で、従順で信頼していた階級や制度が蝕まれ始めたのである。保守派はおそらく、六月事件の時ほどは脅威を感じなかったかもしれないが、それでも、その時と同じほど、動揺していたことは事実である。

立法議会が召集されるとすぐに、ジャコバン派は攻撃を開始した。六月二日、ルドリュ・ローランは、ウディノーのローマ遠征について政府に尋問した。彼はその行動は違憲であると主張した。なぜならば、憲法の条文のひとつに、「フランス共和国はすべての外国人を尊重する。いかなる人民の自由に対しても武力を行使することはない」と謳われているからである。議会はジャコバン派に反対し、政府を支持した。六月三日、いくつかの急進派の新聞は、大統領と閣僚は憲法を犯した。国民兵は両者に反対して蜂起しつつある、と記した宣言文を発表した。宣言文は憲法を守るために軍隊を要求した。同日、ルドリュ・ローランと国民兵の三つの軍団の將校たちは、ローマ遠征に反対するデモを編成した。しかし、デモ隊は騎兵隊に襲撃され、解散させられてしまった。ルドリュ・ローランや何人かのジャコバン派、そして社会主義派の指導者たちは、国外へ脱出せざるをえなかったのである。

注

- (1) フロペールは、そのことを『感情教育』の中で記述している。
- (2) このあとすぐに、二人の秘書官は臨時政府の正式メンバーになった。
- (3) 一八四八年のジャコバン派は、最初の革命の時の偉大なジャコバン派とは全く違うものであった。すなわち、より高潔で

あり温和であった。彼らは政敵を嫌悪することよりも正義を愛したのであろう。彼らは無慈悲でもなければ裏切りものでもなかった。彼らはロベスピエールとサン・ジュストを除く、一七九三年の偉大なジャコバン派が殆どそうであったような皮肉屋でもなかった。虚栄心がなければ、一八四八年のジャコバン派は革命家というよりも慈善家という方が適していた。

(4) 実際につくられた国立工場は、社会主義者が求めていたものとは似ても似つかないものであった。しかし、それは社会主義者に対してなされたひとつの譲歩であった。穏健派から引き出された最善のものであった。

(5) それは二番目の「赤」の恐怖であった。それが「赤」とよばれるようになったのは、二月革命以来、急進派を「赤」とよぶことが保守的な集団の中では流行となったからである。一八四八年二月二四日、パリの市庁舎の外にいた群衆は、新しい共和国の象徴として赤旗を要求した。しかし穏健共和派のラマルティヌは、フランスのために三色旗を用意した。赤旗は当時社会主義ではなく反乱を意味していた。それは革命的で急進的なパリの旗であった。ラマルティヌは群衆に対して、今フランスに受け入れられるのは三色旗だけであると言って説得した。

※本稿は、JOHN PLAMENATZ, *The Revolutionary movement in France 1815-71* (LONDON・NEW YORK・TORONTO, 1952) の翻訳である。章・節以外の小見出しは訳者がつけた。注も最後にまとめた。(一)は、「序論・第一章 大革命」、(二)は、「第二章 復古王政」、(三)は、「第三章 七月王政」。次回(四)は、「第四章 第二共和政」の後半部分(二)とする)である。